

## 「第11回『私たちと北方領土』作文コンクール」入賞者一覧

賞名	題名	名前	市町村名	学校名	学年
富山県知事賞	北方四島を返還するために ～まずは国民の意識から～	石崎 史真	魚津市	西部中学校	2年生
北方領土問題対策協会 理事長賞	北方領土返還を叶えるために	飯澤 都子	黒部市	鷹施中学校	3年生
北方領土返還要求運動 富山県民会議会長賞	北方領土問題の解決に向けて	表野 美佑	射水市	射北中学校	3年生
富山県教育委員会 教育長賞	研修旅行で学んだ 北方領土問題の現状	牧野 将也	射水市	小杉中学校	3年生
富山県市長会会長賞	近くて遠い「北方領土」	深川 春乃	黒部市	高志野中学校	3年生
富山県「北方領土問題」 教育者会議会長賞	北方領土問題の解決を目指して	木村 紬	黒部市	桜井中学校	3年生
入 選	北方領土を後世に残すために	徳道佳璃奈	黒部市	宇奈月中学校	3年生
入 選	北方領土の未来とは	新田 風花	黒部市	宇奈月中学校	3年生
入 選	北方領土学習会で心に残ったこと	大崎真里亜	魚津市	西部中学校	2年生
入 選	私達と北方領土	山田 恭令	魚津市	東部中学校	3年生
入 選	北方領土問題の解決策	四谷 結衣	富山市	呉羽中学校	3年生
入 選	北方領土問題の解決に向けて	前 諒哉	射水市	小杉中学校	3年生
入 選	変えるために	門嶋 沙羅	高岡市	牧野中学校	3年生
入 選	自分事として	細 智央	氷見市	十三中学校	2年生
入 選	願い	永井ゆりか	南砺市	城端中学校	3年生

## 北方四島を返還するためにまずは国民の意識から

魚津市立西部中学校 二年 石崎 史真

「皆さん、返還運動に参加する勇氣を持ってください。」

この言葉は、北方領土返還要求根室市民大会での弁論発表の一部です。僕は、この言葉を聞いて、「その通りだ。」と思いました。確かに、元島民の高齢化が激しく、早期解決が重要とされている今でも、地元である北海道以外では、あまり返還運動に積極的ではないと思います。

僕は、八月三日から七日まで、富山県北方領土復帰促進青少年北海道派遣団に参加し、北海道を訪れました。ここでは、北方領土返還に対する、人々の熱い思いを感じました。

初日は、札幌へ行き、北海道庁を訪問しました。北海道庁では、道議会でもこのことは話し合われていることや、返還に向けていろいろな取り組みを行っていること等を語られました。

取り組みの一つとして、北海道庁では、小さな子供に北

方領土を楽しく学んでもらえるような、「北方領土サマーフェスティバル」という取り組みを行っていました。僕は、この取り組みを見て、他県でも、同じような取り組みを行えば、小さな子供だけでなく、その保護者にも北方領土問題を理解してもらえて、返還運動が活発になると思いました。

三日目には、北方領土返還要求根室市民大会や根室市中学生との意見交換会に参加しました。

北方領土返還要求根室市民大会では、現地である根室市の方々と元島民の方等の熱い思いを感じました。その中でも、冒頭に述べたあの言葉が印象的でした。意識に差があると、北方領土問題は解決しないと思います。

では、どうすれば国民に北方領土問題を知ってもらえ、意識が高まるのでしょうか。

大会の後の行われた、根室市中学生との意見交換会で、このことが話し合われました。

僕は、意見として、北海道庁で行われていた「北方領土サマーフェスティバル」のような、子供も楽しみながら学べる企画を行う、社会の教科書にのせる量を増やすという意見を出しました。僕も、社会の時間に北方領土について学びましたが、そのことが書かれているのは、約半ページ

でした。これだけしか書かれていなかったら、重要な問題であることが、あまり伝わらないと思います。

また、他の人の意見では、ポスター等をたくさん貼る、SNSで広める、CM等を流して広める等の意見が出ました。意見の中には、若者に知ってもらえるようにするという意見が多かったです。元島民の高齢化が進んでいる今、若者に知ってもらわないと、この問題は進まないと思います。

最終日には、納沙布岬へ行き、北方領土を自分の目で見ました。北方領土の一部は、肉眼でも見ることができ、なぜこれ程近い島をロシアが支配しているのかと思いました。

この近さを国民全員が目に見れば、みんな僕と同じようなことを思うでしょう。

現在、この問題を解決するには、若い人が団結することが必要です。北方領土問題を解決するため、まずは、国民が意識をすることが重要です。正しい知識を持ち、団結して、返還運動をするべきです。北方四島が戻ってくる、その日まで。

### 北方領土問題対策協会理事長賞

## 北方領土返還を叶えるために

黒部市立鷹施中学校 三年 飯澤 都子

私は、この夏、富山県北方領土復帰促進少年少女北海道派遣団の一員として、北海道根室市で開催された「北方領土返還要求根室市民大会」に参加してきました。秋には、学校で、元島民の方や、その家族による「北方領土出前講座」があり、学習する事ができました。色々な立場の方の話を聞く事ができました。皆さんが、北方領土問題の早期解決、返還を強く願っておられる事が分かりました。

北方領土は、我が国固有の領土であるのに、一九四五年、旧ソ連によって不法占拠され、生まれ育ったふるさとの島々を、強制的に追われた方が、一七二九一名もおられます。そして、その六割を超える方々が、ふるさと返還を夢見ながら、他界されてしまっています。高齢化が進み、現在、生存者が四割です。「生きているうちにふるさとの土を踏みたい、踏ませてあげたい」そんな想いから、一分一秒でも早い北方領土問題の解決が望まれているのです。

私の曾祖父も、齒舞群島の水晶島でコンブ漁をしていたそうです。季節労働者だったので、黒部に自宅があり、帰ってくる場所がありました。それでも、どんな気持ちで黒部に戻ってきたのでしょうか。やはり、元島民の方の話のような暮らしをしていたのでしょうか。黒部の家族と暮らせてよかったですけど、きつと島の事は、亡くなるまで考えていたと思います。曾祖父を知る祖母も亡くなってしまっているのです。話を聞く事ができないのが残念ですが、北海道へ行き、島の近くまで行った事で、そこに曾祖父が働きながら暮らしていた事は、ずっと忘れません。

私が今回の経験をした事で、北方領土の話を家族と話すようになりました。祖父から、「亡くなった祖母には、兄弟がたくさんいて、皆、北海道へ行き、島を見て来たが、祖母だけが島を見た事がなかった」と聞きました。私は、北海道へ行った時、納沙布岬から、島を見てきていたので、祖母にも見せてあげたかっただけだと思います。元島民の方々も、いろんな想いで、島を眺めたはずで、島は、本当にはつきり見えるくらい近いのに、今は、行く事ができない遠いふるさとです。元島民の方が、再び帰る事ができるよくなればよいと思います。

私の住む黒部市は、北方領土からの引揚者が多い事もある

り、北方領土問題について、教えてもらう機会が度々ありました。それでも、北海道へ行くまでは、関心が薄かったと思います。そんな私が、いろんな方々の、島に対する想いを聞いた事で、心が動きました。私にもできる事があれば、協力したいと思うようになりました。そして、話を伝える事で、こんなにも想いを届ける手段になるのだと、実感しました。

若い世代の私達が、島の事に関心をもつ事が、返還につながると思います。

根室市の学生は、北方領土について、自分の意志をしっかりともっている方が多くいました。しかし、現状では、身近に関係する人がいないと、なかなか北方領土問題について考える人は少ないのではないのでしょうか。けれども、元島民の方の想いを知るきっかけさえあれば、島に対する関心をもつでしょう。

私ができる事は、今回教えてもらった事、感じた事を周りの人に伝える事だと思います。

北海道をはじめ、富山でも、関係者の方が、長い間努力され、続けてこられた運動、活動等に目を向け、特別授業や講演等を通して、理解者が増えると思えます。

納沙布岬から見た島は、想像以上に大きくてびっくりし

ました。元島民の方が、大切なふるさとへ再び帰れる事を望みます。

返還になった時には、ロシアの方が、日本が味わった悲しい気持ちにならないような、両国が平和になる方法で解決してほしいです。

北方領土問題の早期解決を心から願います。

北方領土返還要求運動富山県民会議会長賞

## 北方領土問題の解決に向けて

射水市立射北中学校 三年 表野 美佑

「北方領土問題」とは何かと聞かれても、私はなんとなく知っているだけで詳しくは答えられないと思う。これはきっと、私以外の人に聞いても多くの人は同じような返答が返ってくるだろう。だが、それが現実だ。まずはこの作文を書くにあたって私自身が、「北方領土」について知る必要があると感じ、調べることにした。

「北方領土」は択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島の四島からなる、「日本固有の領土」であることがわかった。

「日本固有の領土」というものの、現在もロシアが「北方領土」を占領している。この現状の解決に向けて私は次のようなことを考えた。

まずは、どのように解決するかということだ。奪われたのだから奪い返す。確かに間違いではない気がする。しかし、この問題は平和的に解決すべきだと私は思う。なぜなら、双方の意見がぶつかりあつたままでは何も変わらないからである。日本側が日本の領土だと主張するように、ロシア側もロシアの領土だと主張するだろう。私が日本が正しいと思うように、ロシアの人々はロシアが正しいと思っているに違いない。どちらもそれぞれ言い分があるはずだ。この対立を合意へと導くには話し合いが必要である。日本とロシアの双方が互いに理解しあわなければならぬ。また、この問題を解決することは日本とロシア間の良好な関係を築くことにもつながる。だからこそ、「北方領土問題」は解決しなくてはならない問題なのだ。

私は、この問題を解決するために必要なことを三つ考えた。まず一つ目は、より多くの人がこの問題に関心をもつこと。日本国民でありながらも、他人事のように考えている人が多い。国民が無関心であると、全く進展しない。一人でも多くの人に知ってもらおう。まずこれが大切だと思う。

二つ目は、一つ目に関わってくるが、「北方領土」に関する情報をメディアで流す機会を増やすこと。これにより少しは、問題の重要性を感じることができると思う。情報を耳にすることによって効果があると思う。

三つ目は、自分の国の思いのみではなく、相手の国の思いも考えること。これは、この問題のみに限らず他のことにもつながってくる。例えば、自分が相手に傷つくような言葉を言ったとする。自分はそこまで深く考えずに言ったとして、相手がある程度傷ついていたらどうだろう。このままでは、相手の気持ちはわからない。しかし、自分が相手の立場になって考えてみると新しいことに気づくことができる。だから、自分の思いのみではなく、相手の思いも考えることは大切だと思う。

私はこの作文を書くまでは北方領土のことについて詳しいことはほとんど知らなかった。でも、この作文を書くために調べていくうちに、「北方領土問題」について今まで知らなかったことや、問題解決への課題などを知ることができた良い機会になったと思う。詳しいことを知っていくと、だんだん関心を持つことができた。

日本国内で、「北方領土問題」のことについて詳しい知識を持っている人は、そんなに多くはないと思う。だから

こそ、何らかの機会で領土問題に少しでも関心を持つてほしいと思う。私の場合は夏休みの課題で機会を得たが、他にも講演会やイベント、日々のニュースなど機会は多くある。「北方領土問題」は自分たちの国の問題なのだから、ひとりひとりが考え、二日でも早い解決に向けて歩んでいくことが大切だと私は思う。

#### 富山県教育委員会教育長賞

### 研修旅行で学んだ北方領土問題の現状

射水市立小杉中学校 三年 牧野 将也

「より多くの人達が北方領土問題を知り、一刻も早く返還を。」

僕は、「富山県北方領土復帰促進少年少女北海道派遣団」の研修旅行に参加し、こう強く思った。

北方領土問題についてこれまであまり考えたことはなかったが、この研修で、北方領土に最も近い根室市で問題の深刻な現状に触れ、日露両国における重要性を肌で感じた。

北方領土とは、齒舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四島のこと、外国の領土となったことがない日本の領土であるにも関わらず、ソ連が第二次世界大戦末期、当時有効だった日ソ中立条約を無視して、北方四島を占領し、一方的に自国に編入したものとされる。

戦前、北方領土に住み、強制的に本土に引き揚げさせられた約一万七千人の日本人の内、北海道に次いで多いのが富山県出身者という。

僕達が訪れた根室の人々は、問題解決を求め運動を展開してきたが、大きな成果が見られないまま七十二年が経っている。

今年七月には日露首脳会談が行われ、共同経済活動に関する協議を加速することが確認されたものの、プーチン大統領は領土問題に関しては譲歩の構えを見せていない。

今も地道に運動は続けられているが、不法占拠が長期間に及ぶため元島民の平均年齢は八十二歳で、高齢化が深刻であり、一刻も早く四島が返還され、故郷に帰りたいと望む声がかつて以上に強まっている。

僕は、「北方領土返還根室市民大会」に参加して、根室の人々だけでなく、全国的に、特に若い人達にこの問題の存在と重大さを知ってもらい、幅広く政府の交渉を支える

必要があると強く感じた。テレビCMや、芸能人を返還推進大使に任命、講演会、映画等が効果的ではないかと参加者同士で話し合った。

富山県に住む僕でさえ無関心だったので、全国にはこの問題を知らない人が多くいると思う。なので、この重大な問題を広めるため、更に、富山や、派遣団の研修で一緒になった鳥取や和歌山以外の県からも中学生を派遣し、返還要求運動を盛り上げていくべきだと思う。

「お前でダメならお前の子供、孫、ひ孫まで、返還の想いを受け継いでいけ。」来賓の一人が元島民である父から言われた言葉が、僕の背中を押し、積極的な考え方に徐々に変わっていった気がする。

研修の最終日に訪れた納沙布岬も、この問題を考えるには重要で、かつ印象深い場所だった。岬からは、齒舞群島である貝殻島や水晶島、国後島を肉眼ではっきりと見ることができ、改めて「こんなに近いのに、なぜロシアの領土なのだ」との思いが込み上げてきた。

そこで聞いた話によると、水晶島にはレーダーがあり、日本の船がロシア領とする海上を通過すると攻撃されるそうだ。しかも昔は、一年中昆布や魚の漁が出来たのに、今は一時期だけ、しかもロシアに料金を払わないと許可が下

りないらしい。

意外なことに、現在四島に住んでいるロシアの人々は、物資が足りず、頻繁に北海道へ買い出しに来なければならぬ。

納沙布岬に建つ、北方領土返還祈念のシンボル「四島のかけ橋」を見学した際、「この橋が四島までつながれば、より安心して暮らせるのに」と、ロシア人島民が日本とロシアのより友好的な関係を望んでいることを知り、外交問題の難しさを感じた。

日本政府は返還後も、ロシア人住民の人権や利益、希望を十分に尊重する意向を表明しており、彼らの幸せや両国の平和のためにも、いつか平和的に日本に領土が返還されることを願っている。

僕自身も、この貴重な経験をできる限り周囲の人達に伝え、少しでも問題解決の役に立ちたい。

#### 富山県市長会会長賞

### 近くて遠い「北方領土」

黒部市立高志野中学校 三年 深川 春乃

北方領土とは、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島のことです。これらは、日本固有の領土であり、一度も外国の領土になっていなかったものです。しかし、第二次世界大戦の終戦間際にロシアに攻められ、終戦から七十二年がたった現在もロシアに占領され続けています。私は、このような北方領土について色々なことを学びました。

今年の八月に、富山県北方領土復帰促進少女北海道派遣団の一員として、北方領土に近い北海道根室市に行ってきました。根室市は北方領土と似たような気候です。富山県に住んでいる私は、「寒い地域だが、夏は涼しくて過ごしやすそうだな」と思いました。納沙布岬に行き、実際に北方領土を見ました。納沙布岬から最も近い、歯舞群島の貝殻島までの距離はわずか三・七キロメートルです。とても近いということは知っていましたが、実際に見てみると思っていたよりも近く、驚きました。また、国後島にあ



る山もはっきりと見えました。北方領土は、明らかにロシアよりも日本に近いことを改めて実感しました。そのような北方領土に自由に行くことが出来ない現状に対し、「早く北方領土問題を解決し、返還してもらわなければならぬ」という思いを強く抱きました。多くの人に納沙布岬から北方領土を見てもらい、日本固有の領土であることを改めて感じてほしいと思いました。

また、私に通っている高志野中学校の校区である、生地地区には北方領土からの引き揚げ者がたくさんいます。そのような元島民の方々が高志野中学校に来てくださり、私達中学生に北方領土についての話をしてくださいました。北方領土は元島民の方々にとって第二の故郷だそうです。とてもたくさんのお水産資源があり、住んでいた頃は魚などが中心の食事で、食べ物に困ることはなかったそうです。現在は豊かな水産資源を自由に獲ることが出来ません。一番の願いは北方領土が返還されることですが、返還されていなくても水産資源だけは獲らせてほしいとおっしゃっていました。私も納沙布岬から海を見たとき、日本が北方領土周辺で漁をしても良い範囲はとても狭いと感じました。これでは、自由に漁をすることが出来ず、獲れる水産物の量は限られると思いました。北方領土周辺の海は世界三大

漁場の一つです。そこで自由に漁が出来るようになるためにも、北方領土を返還してほしいです。

このように、北海道根室市に行ったり、元島民の方々の話を聞いたりして、北方領土問題がとても身近なものであることに気が付きました。これまで、返還要求運動の中心となってきた元島民の方々は高齢化が進んでいます。だからこそ、私達のような若い世代が北方領土の返還を訴えていかなければならないと思います。私は、これからも北方領土に関心を持ち続けていこうと思います。一日でも早く、北方領土が返還される日が来てほしいです。そして、一人でも多くの元島民の方が故郷である北方領土に戻れるようになってほしいです。

富山県「北方領土問題」教育者会議会長賞

## 北方領土問題の解決を目指して

黒部市立桜井中学校 三年 木村 紬

全く興味も関心もなかった北方領土問題について知るきっかけとなったのは、中学校での総合的な学習でした。

ほとんど知識がない状態から、北方領土問題についてのレポートを書くために、これまで何時間もかけて一生懸命調べ学習に取り組んできました。基礎的な知識を調べていくうちに、ロシア側からの視点でも北方領土問題について見てみたいと思うようになり、「ロシア側から見る北方領土問題」をテーマに、主に北方領土の返還運動について調べ学習を行っています。

そもそも、この北方領土問題が起こったきっかけとなるのは第二次世界大戦です。当時、日本とロシアは「日ソ中立条約」を結んでおり、お互いに侵攻し合わないことを約束していました。しかし、この条約を一方的に放棄したロシア側は、八月十八日に千島列島に侵攻してきました。このような事情から、日本側では「ロシアによる不当な侵攻と支配がなされている」という意識が強く、また第二次世界大戦以前に北方領土がロシアの領土になったことはなく、日本固有の領土であるという観点から、返還するべきと主張しています。

これに対し、ロシア側は「『日ソ中立条約』を先に破ったのは日本側である」と主張しています。第二次世界大戦時に日本が満州において演習という名目で行った軍事行動により、ソ連軍の一部を引きつけ、当時ソ連軍の敵であっ

たドイツ軍を間接的に援護したことになります。また、一九五六年に締結した日ソ共同宣言には、「歯舞諸島と色丹島の二島を平和条約締結後に返還する」とあるというのが、ロシア側の主張です。お互いに言い分があり、なかなか決着がつきません。

両国が、早期の解決のため話し合いを進めている中、日本国内にも北方領土返還を目指して活動が続ける方がたくさんいます。私の中学校では、その内の元島民の方々のお話を聞く機会がありました。島での生活や思い出の話の最後に、北方領土への熱い思いを語っていただきました。自分達は北方領土が返されるまで、講演会や署名活動を止めるわけにはいかないと強い気持ちを伝えてくださった後、優しい口調でこのように言われました。「もう一度、北方領土へ帰る日が来るのを楽しみにしているんです。」

この一言に私は心を動かされました。これまで、北方領土問題をひとごとだと思っていた自分を申し訳なく思いました。そして、この言葉を言われたときの、元島民の方の笑顔からは、私達への期待も感じられました。

北方領土問題は日本とロシア、双方の発展のためにも早期の解決が望まれます。解決のためには、まず、国民一人一人がこの北方領土問題を知ることが大切だと思います。

政府だけの問題にするのではなく、私達は元島民の方からの期待に応えられるよう、この問題についてしっかりと考えていく必要があります。私もこの機会を無駄にすることなく、一日でも早く日本人が北方領土へ帰ることができるようになることを楽しみにしたいと思います。

## 入 選

### 北方領土を後世に残すために

黒部市立宇奈月中学校 三年 徳道佳璃奈

何年も前から「北方領土返還」に向けて、国内で活動している人達がたくさんおられます。私も何度か街でその活動を見かけた時があります。署名活動や講演会を開催されているそうです。

現在北方領土はロシアによって不法占拠されている状態です。太平洋戦争後、日本は当時のソ連と日ソ中立条約を結んでいたにも関わらず、ロシアは日本の四島に無断で侵入し、強制的に占領してきました。その事に関してはアメリカが関与しているようですが、その事もあるのか未だに

ロシア側と日本側の意見が食い違い、話が前に進んでいない状態が続いています。しかし北方領土を不法占領しているロシアですが、その島に住んでいるロシア人達は何十年もその島で生活している人達ばかりで、島を自分の故郷と感じ、慕っている人も多いようです。北方領土が元島民のふるさとであると同様に、ロシア人にとってもふるさととなっているのです。そう考えてみると、返還活動はとても大切なことだと思いますが、少し時間が経ち過ぎているのではないかという思いもあります。

富山県からも多くの方が北方領土で生活しておられました。その方々に今回、直接お話を聞くことができました。聞いたお話は授業では習わないような、とても貴重なことばかりでした。お話の中では元島民の方々の心の中に踏み込んでしまうようなお話もしていただき、聞いていて私も心に刺さるものがありました。たとえば、幼い弟さんを亡くされた方のお話では、食べさせるものもなく、栄養失調で亡くなった時、何もないところに深い穴を掘り、そこに埋めていたそうです。それを聞いた時、心が締め付けられるようでした。私にも年の離れた妹がいるのですが、もし妹を助ける事ができなかつたら、自分の責任なのではないかと思うし、もつと違うところで眠らせてあげたいと思うのだと思います。きつ

とその方も私と同じような気持ちだったのではないでしょう  
か。また、五才児が二才の子どもを子守りしているというの  
にはおどろきました。今の子どもでも子守りはするのかわし  
れませんが、まだ五才の子が二才の子の面倒を見るのは、す  
ごい事だと思えます。私が五才の時は自分の事ばかりで、周  
りを気にする余裕もありませんでした。しかもその五才の子  
が親のお手伝いをしていて、それがあたり前だと聞いた時  
は、本当におどろきました。当時の自分と比較してみても、  
全然違いました。時代だと言われるとそうかもしれませんが  
が、他にも今の私たちには考えられないような事ばかりで  
した。そんな中でも楽しくやっていたと言われる元島民の  
方々は、話しておられる時も昔を思い出しているようで、  
心なしか楽しそうにも見えました。本当に当時は楽しかつ  
たのだなと思えます。

現在生存しておられる元島民の方はとても少なくなつて  
います。直接お話を聞くことができるのは、私達の世代で  
終わりかもしれません。私達はとても貴重な体験をするこ  
とができました。やはり昔の懐かしい思い出や、ロシアに  
占領された時の事などを分かっておられるのは語り部の  
方々だけです。しかし、私たちもその思いを受け継ぎ、次  
の世代の人たちに伝えていくことはできると思うのです。

ロシアにも日本にも大切な四島です。確かに返還してほし  
いと思つています。しかし、お互いがしっかりと納得した  
形でおさまつてくれると少しはいいのかなと思えます。た  
とえ返還してもらえなくとも、こんな事があったのだと伝  
えていくことができれば、少しは関心をもってもらえると  
思います。私のように北方領土の事を知らない人は大勢い  
ます。そんな人達に伝えていけたらいいと思うし、自分も  
貢献できると思います。

## 入 選

### 北方領土の未来とは

黒部市立宇奈月中学校 三年 新田 風花

私は今回の出前講座を通して、北方領土への認識が大き  
く変わりました。

出前講座を受ける前の私の中の北方領土は生活が苦し  
く、本土から離れているため色々と不便な生活を送ってい  
たというイメージがありました。また、現在はロシアに占  
領されており、北方領土の返還が問題になっていることは

知っていました。しかし、今回の出前講座で元島民の方々からお話をうかがい北方領土はとっても良い場所だなと思いました。生活は昆布や貝などの海産物が豊富で昆布漁などを仕事にしている、生地に住んでいた時よりも収入があつたので楽だったそうです。

また、本土から離れているからといって不便というわけではなくお金がある程度貯まっただけから本土に行き、その時に必要な物をまとめて買って買ったため、そこまで不便ではなかったそうです。北方領土の元島民の方々は本土から離れていても不便さを感じさせない工夫した暮らしを送っていたことが分かりました。島にいたときは、親は働くだけの生活で、男性は船で昆布をとりに行き、女性は船の帰りを待って男性と協力して昆布を浜へ引き揚げていたそうです。こういった面からは「働き者」の越中人ならではのことが分かります。

しかし、北方領土は現在、とても難しい問題を抱えています。それはロシアの不法占領です。この北方領土問題は、ソ連軍が昭和二十年八月終戦時から日本固有の領土である択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島を不法に占拠したことに始まりまし。昭和三十一年の日ソ共同宣言により国交が回復し、歯舞群島及び色丹島を日本に引き渡すことにな

りましたが、その後ロシアが姿勢を変え、日本との間にこのような問題は「存在しない」「解決済み」などと主張し、引き渡しは取り下げられました。ロシアからの占領時にはある程度情報が入ってきておりいち早く船で本土へ逃げた人もいれば逃げ遅れた方もいたそうです。逃げ遅れた方はとても怖い思いをした方もおられたそうです。残った島々の方々は「ロシア人に見つかる」と思われ「必死に隠れていたそうです。特に女性や若い子供は捕まると何をされるか分からない」ということで若く見せない、女だと気づかれないように顔に炭をぬっていたそうです。また、ロシアの軍隊の人は鉄砲や鉄カブトなどで武装をしていたそうです、抵抗できない状況だったことが分かります。

しかし、現在では北方領土を訪れたさいには島に住むロシアの方々との交流をしているそうです。その時にはロシアの島民は元島民の方々を温かく歓迎してくれたそうです。こうしてロシアとの北方領土での交流が深くなってきた今、どうやって問題を解決していくのが気になります。もし、北方領土の島を全て日本が取り戻したとしたら今島に住んでいるロシアの人々を追い出してしまうことになるのではないのでしょうか。いくら日本の領土が戻ってきたからといってこういった結果になると少し心苦しくな

ると思います。日本の固有地というのは事実ですが、ロシアとも交流できる「みんなの北方領土」として北方領土を守っていけるのが一番良い在り方だと思います。富山に暮らす私たちは北方領土と深い関わりを持っています。「未だ中学生だから関係ない」ではなく、私たち中学生でもできることはたくさんあります。

また、北方領土の未来を決めるのは私たちかもしれません。決して北方領土の未来が暗く沈んだものにならないよう、私たちができることを考え、これからも領土問題に対して真剣に取り組んでいきたいです。

## 入 選

# 北方領土学習会で心に残ったこと

魚津市立西部中学校 二年 大崎真里亜

私は、七月二十六日から二十八日まで北海道根室市へ行き、北方領土についてたくさん学んできました。この二泊三日で、私が特に心に残ったことが三つあります。

一つ目は、北方領土を自分の目で見たことです。当日は

とても天気がよく、遠くの方の国後島を見ることができました。見ることができるといっていいほど近いのに、私たち日本人が立ち入ることができないのが残念に感じました。

二つ目は、元島民の方の講話です。色丹島出身の中田勇さんが、私たちに講話を聞かせて下さいました。中田さんはとても明るい方で、元気に講演を始めて下さいました。しかし、講演が進むにつれ、中田さんの口調は変わっていききました。何だか、辛く苦しそうな口調でした。私はこの時、故郷を失った島民の方の悲しみを目の当たりにし、北方領土問題は絶対に放っておいてはいけない問題なのだと実感しました。

三つ目は、根室市内に着いた時のことです。市内に着くとすぐ、「北方領土を返せ」と書かれた旗を見つけました。最初はその旗一つだけだと思っていました。しかし、それから市内をバスで移動していると、いくつも「北方領土を返せ」と書かれている旗がありました。また、それは根室市内だけではなく、中標津町内をバスで移動している時にもいくつか旗を見かけました。市などでこのような取り組みがあることを知り、とてもいい取り組みだと思いました。しかし、一部の地域だけの問題としてだけとらえられているような気がします。この北方領土問題は日本全体で

考えるべき問題だと思ふので、日本全体でもこのような取り組みが増えていったら良いと思ひました。

私たちは二泊三日の北方領土学習で、たくさんの貴重なことを学んだり、経験することができました。そして、より一層、北方領土を身近に感じ、北方領土の返還について、何か私たちにできることはないか、と考えるようになりました。

私自身、この体験で学んだこと、感じたことを友人や家族に話したいと思つています。けれど、自分一人の力で北方領土問題が進展する訳ではありません。皆で協力すれば、近いうちに進展はあると思ひます。なので、皆と協力して、北方領土のことを伝えていきたいです。

## 入 選

# 私達と北方領土

魚津市立東部中学校 三年 山田 恭令

私が住む富山県は、北方領土からの引き揚げ者が全国二位。また、根室・歯舞群島のコンブ漁は富山県の先人に

よつて開拓された。私がこのことを知つたのはつい最近だ。たくさんのつながりがあることを知つた私は、北方領土に興味を持った。

北方領土は、択捉島、国後島、歯舞群島、色丹島の四島である。昭和二六年、日本はサンフランシスコ平和条約を結び、千島列島を放棄した。しかし、この時放棄したのはウルップ島から北の島であり、北方領土は含まれていないのだ。ロシアは不法占拠を続け、七十年以上たった今でも交渉が進んでいない。さらに調べていくと、日本政府は日本国民に対して、北方領土へ渡航することを自粛するように要請していることを知つた。自分の故郷に帰りたくても、帰ることができない、という人達が富山県にたくさんいる。このことを知つたとき、北方領土が少しでも早く返還されるといいなと思つた。

しかし、今北方領土に住んでいるロシア人のことを考えると、複雑な気持ちになつた。元々北方領土に住んでいた日本人が引き揚げさせられたことを非難するなら、私達はロシア人を引き揚げさせてはいけない。北方領土で生まれた子供にとっては、ここが故郷になるのだ。だからこそ、ロシア側も簡単に手放すことはできないし、日本側も諦めることはない。

## 北方領土問題の解決策

富山市立呉羽中学校 三年 四谷 結衣

ふと、私は思った。日本とロシアが北方領土を共有することはできないだろうか。そうすれば、引き揚げ者は故郷へ帰ることができるし、北方領土に住むロシア人も故郷を失うことはない。どちらの国も、北方領土を大切にしたいのならば、片方が得をするのではなく、両方が平等になるべきである。きっと、一つの土地を二つの国が管理するということは、とても難しいのだと思う。経済面でも問題があるだろうし、ロシア人と日本人の文化の違いも影響してくるだろう。だが、日本とロシアが手を取り合えば、解決策を見つけることができると思った。

そのためにも、私達はもっと北方領土のことを知るべきだ。日本とロシアの間で、どのような問題があるのかをたくさんの人に知ってほしいし、国全体で考えてほしい。たとえこの問題を解決するのに時間がかかっても、北方領土を大切に思う気持ちを忘れてはいけない。両国が幸せになるためには、一人一人が協力することが大事なからだから。

北方領土。この言葉を聞くと、私は日本領土であったものが旧ソ連に占領された土地だと思い浮かべる。しかし、調べていくうちに旧ソ連、現在のロシアにも北方領土を支配する、はつきりとした理由があることが分かった。

北方領土は四つの島からなっていて、総面積は約五〇〇〇平方キロメートルと愛知県や千葉県に匹敵する大きさである。縦に長い島であるから排他的経済水域の面積も大きいことであろう。両国が交渉を続ける理由も分かる。限りある大切な資源を少しでも多くとりたいという思いはどの国も同じであると思う。だからこそ、互いの利益や損得に配慮して均等な配分を行わなければならないと思う。

そこで私は、いくつかの方法を考えてみた。

一つ目は四つある島を二つずつに分ける方法だ。領土を分けるにあたり一番やりやすいと思う。しかし、仮に日本が択捉島以外の三島を領土としたら、三島を合わせても択



捉島の面積には届かないくらいの差があるので日本にとって不利な条件である。したがって、この分け方は均等ではない。

二つ目は面積を同じにすることを重視する方法だ。一見、円満に話が進みそうである。しかし、そうなると島の上に境界線をつくることになるのでどこからが自分たちの領土なのかもめてしまう可能性が高いので良い方法だとはいえない。

三つ目は特に領土を分けられない方法だ。私はこの方法が一番良いと思う。あえて分けられないことで誰もが今まで通りに暮らせると思うし領土における問題点は何もないと思うからだ。ロシア語と日本語の二言語に対応した公共施設にすることで不自由ではなくなると思う。資源問題に関しては毎月、毎年など区切りをつけて獲得量の限度を決めればどちらかが獲りすぎて資源がなくなるといふことも防げると思う。だから私は、この案をお薦めする。

第二次世界大戦が終戦してからの七十二年間。これまでずっと未解決のままであった北方領土問題を、今こそ解決させるべきではないだろうか。最近行われたプーチン大統領との首脳会談では安倍総理が話を切り出すことに成功した。このまま何とか本題に持ちこんでいってほしいと思う。

北方領土に住んでいたほとんどの方がかなりの高齢で亡くなっている方も多くいる。そんな方たちの思いものせてぜひ解決に向かつてほしいと願っている。

## 入 選

### 北方領土問題の解決に向けて

射水市立小杉中学校 三年 前 諒哉

最近、社会科の授業で北方領土問題について討論をした。議題は「今後、北方領土をどうするべきか」というざっくりとしたものだった。しかし、クラスの仲間の関心は少し薄かった。まるで他人事のように。

僕は、北方領土問題について活動していかなければならない立場にいる。その理由は後述する。北方領土問題が生じた原因は、七十二年前の一九四五年（昭和二十年）に、ソビエト連邦（現ロシア連邦）の軍隊が北方領土へ侵攻、占領してしまったからである。この日以来、日本は「北方領土返還」の声を上げ続けているのである。私の祖父は歯舞群島の水晶島出身だ。そして、祖父の兄は千島歯舞諸島

居住者連盟富山支部の支部長として多くの活動を同志と行っている。そう、僕は「北方領土旧島民三世」なのだ。だからこそ、前述した通り旧島民の方の後継として活動していきたいと思っっているのだ。祖父は今年で七十七歳となる。旧島民の方の高齢化も進み、実数も年々減少している。ということは、返還運動を引き継ぐ若者がこの先必要となるのだ。そのためには学校でより北方領土について学び、この問題を身近なものにすることが重要だ。

北方領土は今や、旧島民だけの故郷ではなく、居住するロシア人の故郷にもなっているが、故郷を思う気持ちは両者同じだ。このことを考慮し、僕は一つ提案をする。それは「北方領土を日本とロシアで共同統治し、返還とする」ということだ。だが、この案にはいくつも問題点がある。でも、お互いに傷つかないようにするためにこれが一番、平和的解決できると思うのだ。

世界には領土問題による紛争やテロが今も起きている。その中で日本とロシアがこの問題を平和的解決したら、世界平和の先駆けとなることは間違いありません。両国には平和を訴えるためにも早期解決して頂きたいと強く思う。そして旧島民の方が故郷の地を踏み、あの頃の思い出に浸れるよう、国民が一体となり返還を実現させましょう。

余談だが、祖父の住む黒部市生地の漁港前の駐車場にはあるスローガンが書かれた柱がある。

「四島還れ！日本の声です叫びです。」

「強い意志束ねて返還北方領土。」

これらは、返還を願う人々が建てた物だと思う。だから僕も、返還運動に参加し、頑張っていきたいと強く感じた。僕の北方領土返還運動はまだまだ始まったばかりなのだ。

## 入 選

### 変えるために

高岡市立牧野中学校 三年 門嶋 沙羅

私はこの夏、県の北方領土復帰促進少年少女北海道派遣団として北海道を訪れました。その北海道派遣の中で私たちは根室市で行われた北方領土返還要求根室市民大会というものに参加しました。私はその大会で二つのことがとても印象に残りました。

一つ目は会場に書かれていた標語です。「『知ること』が 四島返還の 第一歩」。「知ること」、これは私たちは

できているようでできていないことです。私たちが知っていることといえば社会の授業で習う範囲のみ。四島がロシアに不法に占拠されているということくらいです。北海道で多くの人からお話を聞きましたが北方領土について勉強していった私でも知らないことばかりでした。日本ではほとんどの人が北方領土問題を知ってはいても教科書のほんの数行くらいの知識だと思います。その現実を根室市の住民の方々や元島民の方々は大変残念がっておられました。はつきり言って今の時代の私たち若者は北方領土があってもなくても生活には影響しません。だから知らないどころか興味もない人ばかりだと思います。しかし、七十二年も解決されていないほどの難しい問題が一部の人のみで解決されるわけがありません。日本全体でこの問題を知り、考えること、その必要性をその標語から思いしらされました。

二つ目は元島民の方の叫びです。大会内では様々な団体の代表の方々が「市民の叫び」としてそれぞれの思いを話しておられました。そして最後に思いを訴えたのは元島民代表の方でした。それまでいろんな方が話をされましたが元島民の方の話は他とは違う何かを感じました。故郷を愛する心、戻れない悔しさ、他にも自分の生まれ育った島に

対する強い思いが感じられました。元島民でなくても返還を望む人はたくさんいます。でも元島民の方々の気持ちはその何倍も深く強いものでした。現在、その元島民の方々の平均年齢は八十歳を超えているそうです。もう元島民の半数以上が亡くなられた今、私たちに時間はありません。四島の返還を心から喜べる人を一人でも多くするため、日本は急がなくてはならないという事実を知りました。

元島民が減っていくにつれ、薄れていく北方領土への関心。日本はこのままで良いのだろうか。そして今、私にできることは何なのか。日本人一人一人がこれを考えるようになれば近い未来が変わり始めるかもしれません。

## 入 選

### 自分事として

氷見市立十三中学校 二年 細 智央

最近、社会科で習ったこともあり、北方領土に関するニュースに新聞やテレビなどで、気付くようになりました。今知っていることは、元は日本の領土だった北方四島

を旧ソ連が不法占領していて四島の返還を求めて日口間で交渉が続いているということ。最初は、ニュースなどを見ても「自分には関係無いな」と思っていてほとんど関心がありませんでした。しかし去年の総合的な学習のときに学んだことや母に聞いたことで少し興味がわき調べようと思いました。

母に聞いた話では、三十年以上前にあつた弁論大会でも北方領土に関する発表をしたそうです。確かに今の状態になったのも一九五一年のサンフランシスコ平和条約からなので六十年以上たっていますから当然と言えば当然です。それでもそんな長い間、交渉が続いていたというのは驚きました。その長い間にはたくさんの方外交官や北方四島の元住人などが北方領土の返還を目指して一生懸命に活動し、努力したのだと思います。僕たちは、そのような人をみんなまで応援し、力になっていかなければならないと思います。

この富山県には北方領土と少なからず関係があります。一年生のときの総合で、「獅子舞」について調べました。すると北海道地方でも、この地域と似ている獅子舞がありました。どうして遠く離れた北海道地方でことよく似た文化があるのでしょうか。調べてみると昔、富山県の人は

たくさん北海道地方の開拓として移住していることが分かりました。そこで故郷を思い出し獅子舞をやり始めたそうです。事実、北方領土が占領されたときに住民が移住した地域は富山県が多いそうです。僕は獅子舞が大好きなので他の地域にもあるというのはとてもうれしい事です。そのことを知ったときは、遠い所にあるイメージだった北方領土などが、とても近づいた気がして、すごく親近感がわきました。そんな風に、文化的に見てもこの県と深く関わっている北方領土が前よりも大切に思えて、同時に早く取り戻したいという気持ちが強くなりました。

ソ連崩壊後、北方領土では、絶滅危具種の動物や北方領土固有のラッコなどの密猟が相次いでいると聞きます。四島の近くには世界遺産の知床半島があります。あのようなとてもすばらしい自然を汚しているのは地球に対して失礼だと思います。領土の返還も大切ですがそちらに対する協議も重要だと思います。日本とロシアが協力して問題を解決するのも、両国の距離を縮めるきっかけになるのではないかと思います。距離を縮めるといえば、今は「ビザなし交流」などでおたがいの国の事を知ろうとしているのは良いことだと思います。おたがいのことを知れば、その相手が何を思い、望んでいるのかを今よりもっと知れて、返還

についても分かってもらえないかもしれません。返還まではいなくても、関係が良くなることは間違いありません。このような活動をもっと続けていけば、変わることはいくらでもあると思います。

北方領土の問題は、今の日本にとって最重要といつてもいい課題の一つです。内閣府に北方領土問題への対応のための機関までおかれるほどです。国としても全力で交渉を進めているとは思いますが、それでも七十年以上前からあり、その長い時間でも解決できなかった問題です。それでも返還への歩みは着実に進んでいます。このままねばり強く交渉を続ければ返還の日も遠くない。そう思っています。僕も早く返ってきてほしいとは思いますが、日口が争うのは嫌です。誰も争うことは望んでいません。もつと二つの国が仲良くなることを望むと思います。それでもやはり返ってきてほしいので、一生懸命方法を模索している人の手助けをできるように今自分ができる全てのことを精いっぱい努力します。

## 入 選

### 願 い

南砺市立城端中学校 三年 永井ゆりか

なぜ、日本は北方領土の返還を求めるのでしょうか。

私たちの国の北東にある四つの島、それが北方領土です。歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島と呼ばれています。北方領土の総面積は、五〇〇三平方キロメートルです。富山県の約一・二倍の広さです。みんなが想像する広さより、北方領土は広いと思います。この北方領土は、今、ロシアの占拠地となっています。国際的な決まりは、どうなっているのでしょうか。北方領土は、一八五五年から日本の領土となっているのです。一九〇五年には、北方領土だけでなく南樺太も日本の領土となっています。それは、条約を結んでお互いに合意の上で決めたことでした。しかし、第二次世界大戦末期の一九四五年八月九日にソ連は、日ソ中立条約を一方的に破棄して対日参戦しました。ソ連軍は、終戦後の八月十八日より千島列島への攻撃を開始し、九月五日までに四つの島は占領されてしまいま

した。一九五一年には、サンフランシスコ平和条約が結ばれ、北方領土は日本の領土であることが決められています。しかし、条約で結ばれているにも関わらず、なぜ北方領土がロシアに占領されている事実があるのでしょうか。これは、許してはいけない事実です。

なぜ、日本に北方領土が必要なのか、この疑問は多くの人が抱いていると思います。私は、北方領土を詳しく調べてみました。詳しく知ったとき、私は答えに辿りつきました。

北方領土は、帰るべき家があるところなのです。四つの島は、約一七〇〇〇人の家がありました。もし、自分の家がいきなり占領され、追い出されてしまったら、と考える能耐られないと思います。実際に、あったことです。元島民たちは、

「家を、土地を、お墓を、思い出を、私たちのふるさとを返して欲しい。」

と言いました。私は、この言葉に胸が痛みました。元島民の中には、もう亡くなってしまう人もいます。二十歳だった人も、現在は、九十歳になるほどの年月が経っています。急がなければいけません。元島民たちが生きている間に北方領土を返してもらわないと、意味が無いのです。

私たちにできること、それは、返還運動に参加するしかありません。元島民だけでなく、私たちが元島民の気持ちを理解することが必要だと思います。元島民がされたことを、やり返してはいけません。ロシアの人たちと、顔を合わせ話し合うことが大事だと思います。難しいことかもしれませんが、少しでもロシアの人たちの理解を得ることが必要です。元島民が、生きている間に島に帰ることができると国民全員でうったえ続けることが大切なのではないでしょうか。